

大阪大学大学院工学研究科主催 シンポジウム

「社会課題とは、統合とは」

令和2年1月22日（水）

第一部：話題提供

司会：工学研究科 教授 藤田 喜久雄

「大学院改革ビジョンと“社会と知の統合”」

統括理事・副学長 田中 敏宏

「“社会と知の統合”に向けたオールラウンド型教育プログラムの意義と展望」

超域イノベーション博士課程プログラム 部門長 木多 道宏

「横断型教育研究をめざすテクノアリーナ構想」

工学研究科附属オープンイノベーション教育研究センター センター長 林 高史

「医菌薬生命系からみた社会と知の統合を含む教育プログラム」

医学系研究科 研究科長 森井 英一

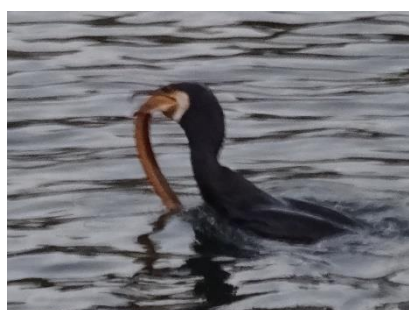
「社会課題とはなにか ―人文学・社会科学からの批判的アプローチ」

人間科学研究科 教授 栗本 英世

「社会課題とはなにか ―人文学・社会科学からの批判的アプローチ」

人間科学研究科 教授 栗本 英世

人間科学研究科の栗本と申します。よろしくお願いいたします。プログラムを見ますと、私は文系の代表ということでこの場にいるのだと思いますが、「社会課題とはなにか ―人文学・社会科学からの批判的アプローチ」ということでお話ししたいと思います。



《 茨木市春日丘のため池の水鳥たち：カイツブリ、バン、ミコアイサ、ウ 》

そもそも社会課題を話すのに、なぜこんな写真が出るのだとお思いかもしれません。これは後で述べたいと思います。良い写真、癒やされる写真です。これを見ながらお話をお聞きます。

まず、この30年間に、私たちの生活がどういうふうに変ったかということを考えてみたいと思います。30年前の1990年にはスマートフォンはもちろん、携帯電話も存在しませんでした。それから、パソコンの普及はごく一部に限られており、コンビニの店数も非常に少なかったと思います。

1980年代の半ば、私は南スーダンと日本の間を行ったり来たりしながら、いろいろと活動していたのですが、南スーダンと日本との連絡方法は手紙しかなく、片道3週間ほどかかりました。つまり、手紙のやりとりをしていると、1カ月半かかるという状況だったので。それが、現在では南スーダンとの通信は瞬時に、極めて容易に行うことができます。映像や画像のデータも、世界中の友人と瞬時に交換できます。2020年の現在、私たちは買い

物の多くやホテルやレストランの検索と予約もインターネット上で行うようになっていきます。つまり、この 30 年の間に私たちの生活は、30 年前の時点では想像もできなかったほど大きく変化しました。このペースで変化を続けていくと、30 年後、つまり 2050 年に私たちの生活はいったいどうなっているのかと思うわけです。30 年後の未来の社会では、ユートピアが実現しているのか、あるいはディストピアになっているのかということです。

現在、既に部分的には実現しているように、それぞれの個人は、主体的に選んでいると思っている消費行動もビッグデータと AI によって誘導されているということがあります。それから、同様に政治制度の根幹である投票行動もそういうふうに誘導されている可能性がある。つまり、管理されている者が管理されているとは認識しない、自由意志に基づいて主体的に行動していると思っているが、実は何者かに管理されているという、究極の管理社会が将来到来するのかもしれませんが。それはユートピアかディストピアのどちらでしょう。さて、現在の日本における便利さの発展は、既にある極点に達しているように思います。これは私の個人的な感想ですけれども。そこから 2 つの疑問が生じるわけです。

1 番目は、これ以上より便利になるために、科学と技術が発展する必要があるのか。2 番目は、こういうふうに非常に便利な社会になった結果、私たちは昔より豊かに、より幸福に人間らしく暮らせるようになっていくのかどうかですね。自分の周りを見渡すと、日本はさまざまな社会経済的問題に直面していることはすぐにわかります。われわれ自身が、その問題の当事者であるわけです。少子高齢化、介護を必要とする多数の人たち、破綻目前の社会保障のシステム、地方の衰退、非正規雇用の増大、新たな貧困層の出現、格差の増大と固定化などがあります。いずれも 30 年前には萌芽的にしか存在しなかった問題であります。じゃあ、30 年後にはこうした諸問題は解決しているのでしょうか。その解決に、科学と技術の発展が貢献しているのでしょうか。

日本政府は、工業社会と情報社会の次に到来する **Society 5.0** では、科学・技術のイノベーションによって、これらの問題は解決すると主張しています。私は一人の研究者としても、一人の生活者としても、この考え方にリアリティーを感じないし、賛成もできません。これについては後で述べたいと思います。過去 30 年間の変化や発展を振り返る。そして、現状を認識する。その次の課題は、30 年後の世の中がどうなっているべきかを構想することだと思います。科学・技術の発展が前提にあるのではなく、将来のあるべき姿に即して、そのために必要な科学及び技術が構想されるべきだと思います。将来のあるべき姿を構想することは文系・理系の違いにかかわらず、それを研究テーマとしているか、いないかにもかかわらず、すべての研究者が頭の中のどこかで考えるべき課題だろうと思います。

続いて、一人の生活者として思うことに移りますが、私は徘徊が好きで、国内外にかかわらず、暇があればあちこち歩き回っています。この徘徊は、俳句の俳諧ではありません。歩き回ること。もっと年がいったら、徘徊老人になりたいと思っています。街の路地を歩くのと同じくらいに、池や川や森のある場所を歩くのが好きなのですが、興味を惹かれるのは、いろいろな動植物と景観です。毎日の通勤路、JR 茨木駅から吹田キャンパスの途中に小さ

なため池があるのですが、そこでさまざまな生き物が命を育んでおり、毎日観察するのを楽しみにしています。最初にお見せしたのはその写真です。これは、ですから徘徊じゃなくて、道草のときの写真ですが。



《 宇野辺駅近辺の風景 》

こういう観察を続けていると、都市部でも自然はまだまだ豊かかなと思えるわけです。しかし、ため池から流れ出る小川をたどっていくと、川はコンクリートで固められているわけです。それはもはや川と呼べる代物ではなく、単なる排水路であり、そこに生息する生き物はごく限られているだろうと思います。このコンクリートの排水路も 50、60 年前までは豊かな命を育んでいたはずです。排水路のすぐ横にはモノレールと高速道路が走っているわけです。これは宇野辺駅近辺で、ここを通るたびに、私は醜い風景だなと思うのです。この風景も「発展」の結果のひとつです。



《 長岡京市の川 》

もちろん日本のあちこちには、まだ自然に近い川があります。しかし、それはコンクリート、鉄及びアスファルトの世界と隣り合わせに辛うじて残っているわけです。左の写真は素晴らしく良いところで、生き物がたくさんいます。こうした空間が、探せば都市近郊にも残っています。しかし、ここから振り返ると右の写真です。これは新幹線と高速道路が走って

います。コンクリート、鉄とアスファルトの世界です。1960年代から70年代にかけて、かつての美しい景観と豊かな動植物の世界はこういうふうになっていったのです。当時の日本人は、それを発展・開発であると思っていました。



《 南スーダン、東エクアトリア地方ラフォン郡の川 》

こうして川の中や川岸を歩いていると、私は南スーダンのことを思い出すわけです。そこにはコンクリートの川はありません。人間が造った堤防也没有。橋もないし、アスファルトの道路也没有。雨期には川は増水し、氾濫します。乾期には枯れてしまう川もあります。川は人々に生活用水と飲み水だけでなく、魚という重要な食料も提供するわけです。同時に、氾濫が過度になると災害になります。近年は、気候変動の結果なのか、過度の大雨と大洪水がしばしば生じて、川は人々の生活を脅かしているわけです。現代の日本とは対照的に、南スーダンの人びとは、いわばむき出しの自然と正面から向き合って暮らしているわけです。

近代以前から日本人は、その時点での最新技術を駆使して治山治水に努めてきました。その結果、私たちはむき出しの自然と正面から向き合うことなく、人工的な環境の中で暮らすようになっていたのですが、その環境は完全ではありません。昨年（2019年）秋の台風19号に伴う大水害は、私たちに人智を超えた自然の猛威をまざまざと実感させることになったのでした。

さて、破壊された景観を修復することは可能でしょうか。そして、危機に瀕している生物多様性を保護し、人間と動植物との関係を回復し、維持することは可能なのでしょうか。この問題と取り組むには、文系・理系、さまざまな学問分野の協働が必要だと思います。

ちょっと話は脱線しますが、数日前、長岡京にある拙宅の近所を徘徊していると、川の中に腹を割かれたイノシシが横たわっているのを目撃し、わが目を疑いました。。猟師さんが仕留めた獲物を川で洗っていたわけです。

その腹を割かれたイノシシの写真をFacebookにアップしたところ、暴力や過激な描写であるとして自動的にぼかしが入りました。つまり、AIはご親切にも写真の検閲もしてくださるということを私は初めて知ったわけです。南スーダンが参照点になっている私は、腹を割かれたイノシシの写真を見て、暴力や過激な描写であると感じる人は、南スーダンにはま

ずいないだろうと思いました。牛や山羊・羊等の家畜は、自分で殺して解体しましすし、野生動物の狩りも広く行われています。つまり、腹を割かれ、皮を剥がされた動物は、日常的な光景の一部なのです。しかし、毎日肉を食べているにもかかわらず、そうした光景を目にすることは日本では、暴力的で過剰だと感じるのが普通なのかもしれません。

そういう AI による自動検閲の問題は置くとして、殺されたイノシシも、またさまざまな問題の象徴だと思います。近年の日本では、獣害が深刻な問題になっていて、毎年駆除されるイノシシやシカは 100 万頭を超えています。そして、猟師の皆さんは高齢化して不足している。殺された獣のほとんどは食べられることなく、焼却処分されている。100 万頭。現在の日本では、かつては維持されていた、つまり持続的であった野生動物と人間とのバランスが大きく崩れてしまっているということは事実であると思います。じゃあ、それを回復し、同時に野生動物の肉という食料資源をどう利用したらいいのか、あるいはそれについて、最適の解を見いだすにも文系・理系のさまざまな学問分野の協働が必要であると思います。

次に移りますが、競争社会はいつまで続くのか、続けるべきかという問題があります。経済社会的な発展と競争は表裏一体の関係にあります。競争があるから発展するわけです。人類の社会はずっと競争に基づいて発展してきました。しかし、私たちはいつまで走り続け、頑張らなければならないのでしょうか。競争は必然的に勝者と敗者、格付けと順位制を生み出すわけです。高度経済成長時代は、みんな、競争に参加できた。頑張れば誰でも報われるという幻想があって、それはある程度事実でした。頑張ったら報われる。つまり、良い暮らしができる。

けれども、現在、その幻想はもう既に崩れています。私は、「1 億総活躍」というスローガンを耳にするたびにうんざりします。私はべつに活躍したくないのです、のんびり暮らしたいのですという人はどうしたらいいのですか。この国には、活躍しない自由はないのでしょうか。そもそも政府はいつまで 1 億総何とかかんとかという国民的スローガンを掲げ続けるのでしょうか。これは、アジア・太平洋戦争中の「国民総動員体制」の名残なのではないですか。

競争は資本主義的な経済の在り方の一部です。20 世紀の経済と社会は大量生産・大量消費、そして大量のエネルギーの消費によって発展してきました。言うまでもなく、エネルギーの大半は化石燃料に由来するわけです。21 世紀の日本はこれを持続していくことができるのかと。統計上や科学的な根拠がなくても、あるいは地球温暖化にブレーキを掛けるために二酸化炭素排出量を減らさなければいけないという大義名分を持ち出さなくても、多くの人は生活者の実感として 20 世紀モデルを継続していくことは難しいと感じているのではないのでしょうか。

しかし、日本の政府は、科学・技術のイノベーションによって、右肩上がりの経済成長を回復する。そのためには、年寄りも女性も働ける者は全て働けというモデルにいまだに固執しており、それに代わる新しいモデルを提起できていないのです。

ともあれ、私たちに課せられた課題というのは、20 世紀モデルに代わる新しい経済と社

会のモデルをいかに構想するのかということになります。ここでも文系・理系、両方の専門知を統合し、大学の英知を結集する必要があるわけです。

これまで述べてきたことから明らかなように、私はさまざまな社会課題は、私たちの生活世界と地続きで、あるいは全ての生活者は、程度の差はあれ、社会課題を自分の問題として認識していると思っています。研究者はもちろん生活者ですから、その事実こそが社会課題を研究する際の出発点であり、帰着点であると思います。社会課題は私たちの生活の外部に客観的な対象として存在しているのではなく、研究者である私たち自身もその当事者であり、その問題の一部であるのだと思います。

Society 5.0 なのですが、これは皆さんのほうが私よりずっとご存じかもしれませんが、内閣府のホームページ https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html には下記のようにあります。

Society 5.0 で実現する社会は、IoT (Internet of Things) で全ての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有され、今までにない新たな価値を生み出すことで、これらの課題や困難を克服します。また、人工知能 (AI) により、必要な情報が必要な時に提供されるようになり、ロボットや自動走行車などの技術で、少子高齢化、地方の過疎化、貧富の格差などの課題が克服されます。社会の変革 (イノベーション) を通じて、これまでの閉塞感を打破し、希望の持てる社会、世代を超えて互いに尊重し合あえる社会、一人一人が快適で活躍できる社会となります。

これから私が述べることは、文系の研究者に特有の考え方かもしれません。ぜひ後で会場にいらっしゃる理系の研究者の感想やコメントをお伺いしたいと思っています。

私はこういう考え方です。Society 5.0 は、とんでもない絵空事に思えるわけです。科学と技術の発展が明るい未来を拓くという近代の信念に基づいた、素朴な SF です。このアイデアを構想し、承認した人たちが、科学技術の発展が全ての問題を解決し、理想の社会が実現するという驚くべきナイーブな楽観主義になぜ立脚することが可能になったのか。そのこと自体が研究に値すると思います。もちろん、科学技術の発展・登用がさまざまな問題の軽減に役立つことは明らかであり、それについては大きな期待があるわけです。しかし、それはあくまで対症療法の 1 つであり、問題の根本的解決に至るとは考えられないのです。Society 5.0 の問題点は、第一に社会を表題に掲げながら、社会に関する考察が欠如しています。これを読んでも社会とは何かが全然わかりません。

第二に、さまざまな社会課題の根本原因が何かについての考察も欠如しています。根本原因を解明し、それを是正することなしに、その結果、生じている社会課題の解決はあり得ないと思います。対症療法は可能だけれども、完治はできないでしょう。しかし、根本原因とは何かを見極めることは容易ではありません。それこそ学問の真価が問われる課題だと思います。

います。例えば、なぜ貧富の格差があるのか。生活者の常識としては、金持ちがいるから貧乏人がある。あるいは、貧乏人があるから金持ちがいるのです。私は、これは真理を突いていると思います。つまり、貧富の格差というのは構造的な問題であって、その構造を変革しない限り、貧富の格差はなくなる。ロボットや自動走行車には、構造を変革できないと思います。もし、**Society 5.0** の唱道者たちができるとお考えなのなら、そう私たちを説得して欲しいものです。

もう 1 つ、重要な問題があります。**Society 5.0** における社会とは、明言はされてはいませんが、日本の社会、あるいは日本という国家の国民社会のことであるようです。そこで問題となるのは、その社会の外部に何が想定されているか。日本という社会の外部に何が想定されているのか。なぜこれが問題となるのか。近代における欧米及び日本の経済的繁栄は、植民地を搾取することの上に成り立っていたのです。植民地、つまり外部があるから、本国は繁栄していた。脱植民地の時代になっても、基本的にはこの構造は変化しませんでした。グローバル化の時代になると、ようやくそれが変化してきた。つまり、経済政治的な世界の一体化が進行する中で、旧植民地諸国が経済的に発展し、政治的な自己主張もするようになって、それぞれの国家の外部というのが消滅したのです。政治的にはまだですが、経済的には世界が一体化した。つまり、世界の他の諸国や地域の犠牲の上に立って、日本だけが経済的な繁栄と理想の社会を享受するということはありません。早い話が、日本は自然資源の大部分と食料の半分以上を輸入に依存しているし、経済は国内消費だけでなく、輸出に依存しているわけですね。これだけでも、国家の枠内だけで未来を構想できないということは自明であるにもかかわらず、**Society 5.0** を考えた人は日本のことだけを考えているように思えるのです。

そろそろ結論を急がないといけません。人文学・社会科学の研究者の発想ということですが、文系研究者の考え方の特徴の 1 つは、その批判精神にあると思います。政府や財界、それに大学の執行部の皆さんが主張することを、そのままごもつともとうのみにすることはまずありません。有り体に言うと、根性が曲がっているということです。なぜその人がそういう主張をするのかということ、いろんな文脈に照らして理解しようとするのです。理解することと、賛成することは別です。もうした文脈化と吟味自体が、批判精神の表れであって、それは、研究者として不可欠な属性であると思います。それと、批判精神と並ぶ文系研究者の特徴は、視点の複数性にあると思います。空間と時間の両面で複数の広い視点を持っている。それは、ひとつの物事を様々な角度から見ることを意味します。それによって、ある現象や問題を相対化することができるし、批判することもできるというわけです。私は、それは文系の研究者の特徴だと思います。

最後に申し上げたいことは、統合に関わることなのですが、ある社会課題を認識し、その解決に取り組むためには、文系と理系の両方を含むさまざまな学問分野の統合が必要であると私は思います。さらにその前提となること、つまり個別の社会課題の認識以上に根本的に重要なことは、未来のあるべき社会と人間の姿を構想することです。これにも、文系と理

系の両方を含むさまざまな学問分野の統合が必要です。その際の何がポイントになるのかということについては下記の3点だと考えています。

- ①正義と公正、そして人間が人間らしく生きることの実現を目指すこと。
- ②日本という国家的な枠組みを越えて、人類全体を展望する視野を持つこと。
- ③人間に関するあらゆる多様性を承認し、その実現を促進すること。

3点とも根源的な問題で、その実践は容易ではありません。けれども、その実践を目指すのだという持続的な姿勢が大切なのだと思います。

大阪大学は、10数年前に制定された大阪大学憲章の精神に始まり、開かれた大学、Open University、あるいは社会の中の大学、社会のための大学、多様性を尊重する大学、さらには、命に向き合う研究の実践による社会課題の解決を目指してきました。批判精神をよしとする私も、こういうスローガンには賛同しています。賛同してはいるのですが、今までのところ、こういう素晴らしい旗印は部分的にしか実現していません。これらを単なるスローガンに終わらせてはいけないと私は思っています。文系と理系の研究者の力を結集して、未来のあるべき社会と人間の姿を構想し、それに基づいて社会課題を認識して、解決の方法を模索すること。それによって始めて、阪大が掲げているものは実現へと向かうことができます。それはひいては、人類全体に対する貢献にもなるでしょう。いわゆる統合というのは、その理想を実現するための手段であると私は考えています。以上です。どうもありがとうございました。